The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国トナカイエベンキ人の社会経済変化 : 19世紀から20世紀前半まで
Author(s)	思, 沁夫
Citation	社会環境研究. 1999, 4, p. 161-170
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国トナカイエベンキ人の社会経済変化

－ 19世紀から20世紀前半まで －

国際社会環境学専攻
思　沁　夫

The Social and Economic Changes of Reindeer Evenkies

Qinfu SI

ABSTRACT

Between 19th and 20th century, the traditional life style of "The reindeer Evenkies" of China had experienced great pressure to transform itself under the influence of colonization by the great powers of Russia, China and Japan.

This article focuses on the economic aspect of the transformation, based on the previous literatures on the Evenkies.

Through the period of those 150 years, the traditional ways of lives of the Evenkies were made dysfunctional as a single set of system by the various factors including the following. They are : the military and political conquest by the Russian, the introduction of Yasak system, the new trading relationship with the outside world, and also the colonization by the Japanese military.

With the most detailed data as available, this article will describe such marginalized history or the history of the being placed as marginalized of the marginalized.

はじめに

17世紀のはじめから，シベリアの先住民の在来の生活形態はロシア人と満州人の支配下に組み込まれる過程の中で著しく変化させられたことはよく知られている。その中で，中国のトナカイエベンキ人は移動という武器をよく使い，支配システムから逃れようとしてきた。そのため中国側のツングース系先住民の中で，彼らほど在来の生活形態をよく保っている先住民は他にはあまり例を見ないとされている。彼らの生活形態は「ツングース伝統社会」，「ツングース伝統文化」として高く評価されてきた。特に中国側の研究者たちは，歴史進化論の観点から，1950年代以前の中国のトナカイエベンキ人の生活形態を一種の原始社会として認定し，研究してきた。また，このような考え方は研究の分野だけに止まらず，地方の民族政策の“制定と実施”にも影響を及ぼした。しかし，1950年代以前における中国のトナカイエベンキ人の生活形態，あるいはその一部分を，あまり変化していない「伝統社会」，「伝統文化」と見ていいのか。もしそうでないとすれば，中国のトナカイエベンキ人の生活形態はどのように変化した，ないしさせられたのか。その変化のメカニズムをもう一度検討する必要があると思う。

私は1996年から1998年まで中国のトナカイエベンキ人について三回の実地調査と資料収集を行なった。本稿はこれらのデータに基づいて，まず19世紀から20世紀前半までの植民地支配下におかれたトナカイエベンキ人の社会経済変化を記述し，ついで中国の社会主義体制下に組み込まれたトナカイエベンキ人の社会経済変化を述べ，その上で理論的検討（考察）を行う予定である。この論文はその前半で，文献資料の整理を行ない，19世紀か

ら1940年代半ばまでの間のトナカイエベンキ人の生活形態がロシア，中国，それから日本の統治下に組み込まれる過程で著しく変容したことについての記述を行なうことにしたい。しかしその前に，エベンキ族と17世紀以降の中国側のエベンキ人全体を簡単に紹介したい。

エベンキ族は旧称ツングース族（Tungus）で，ツングース語系諸族に属する（荻原真子　1991年　P.79)。この論文では，エベンキ族一般を指す時に“エベンキ族”という言葉を用い，その一部分を指す時にエベンキ人（ないし××エベンキ人）とする。エベンキ族はかつて，西はエニセイ川から東は太平洋海岸まで，南はアムール川，大興安嶺，小興安嶺から，北は北極海までのほぼ全シベリア地域に住んでいた。彼らは独特の文化をもって，広大なツンドラやタイガーの中で狩猟やトナカイ飼養によって生活を支えていた。手近にある材料を使って弓矢，槍，スキー，衣服，テントの覆いなど家庭用品や生活に必要なものの大部分を作っていた。エベンキ族は運搬の手段としてトナカイを使うだけではなく，彼らはまたトナカイの雌からミルクを搾る数少ないシベリア民族の一つである（ジェームス・フォーシス　1998年　P.67）。エベンキ族は20世紀の初めまで統一された政治組織を形成したことはなく，多くの孤立した氏族集団に分かれて生活を営んでいた。彼らは父系の族外婚の氏族（クラン）組織をもっていたが，よく機能していたのは“ウリロン”（リネージ）という組織であった。“ウリロン”は幾つかのテントから構成され，生活単位と経済単位でもあった。エベンキ族はシベリアの自然環境に見事に順応した生活パターンをもっているだけではなく，シベリアの自然と動植物に対する独特な精神世界も持っていた。シベリアの大部分の先住民と同様に，エベンキ族の宗教はシャーマニズムである。“シャーマン”という言葉はエベンキ語に由来する。

清王朝がアムール川地方（ゼヤ川地方も含む）と中国東北部を支配するようになったのは努爾哈赤と皇太極が1583年から1636年までの50年以上の歳月をかけて達成したことであった。この地域が清王朝に統治される以前には，シルカ川流域，アムール川上流域やゼヤ川流域に住んでいたエベンキ人は，モンゴル語を話すダフール人や，あるいはさらにアムール川下流域のジュチェル人と一緒にアルバジン城，ドチン城，アサイジン城，タキン城など岩で囲まれた城屯を作り，幾つかの集落に分かれ，漁労，牛牧，農業などの生業によって生活を営んでいた。17世紀以降，ロシア人がこの地域に侵入してくると，満州人はここに住んでいた先住民に嫩江流域に移住するよう命じた。嫩江流域に移住させられたエベンキ人（満州人にソロンと呼ばれるエベンキ人）の人口は4,900人と言われている（鄂温克族簡史編写組　1983年　P.22～24)。それ以降，エベンキ人，ダフール人やオロチョン人などは清王朝の八旗制に編入され，旗軍の軍務につくことを余儀なくされた。

17世紀後半，ネルチンスク条約によって，この地域には，ロシアと中国の国境が設けられたが，19世紀以前には何らの有効な人の移動を制限するものがなかったので（アムール川は年に六カ月以上も凍るため，何の障壁にもならなかった)，シベリア側に住んでいたエベンキ人はスタノボイ山脈から大興安嶺まで自由に動き回っていた（ジェームス・フォーシス　1998年　P.225)。19世紀初め，現在の中国のトナカイエベンキ人はロシア人猟師やヤクート人などによって，猟場を奪われ，その当時まだ人があまり住んでおらず，しかも動物資源が豊富であった大興安嶺北部に獲物とトナカイの餌を求めて移住した。20世紀初めまで，彼らは中国側の領土に住んでいるにもかかわらず，政治，経済，文化の面ではロシア人の影響の方が強かった（Lindgren, J　1930年　P.20）。

1930年代から日本は中国東北地方で植民地を建設した。もちろん先住民もその植民地支配下におかれた。中国解放後，中国のエベンキ人（それぞれ周りの民族たちにソロン，ツングース，ヤクートと呼ばれていた。その内，ヤクートと呼ばれていた人々がトナカイエベンキ人である。トナカイエベンキ人はヤクート人と隣接して住んでいた

め，ロシア人は誤ってトナカイエベンキ人をヤクート人と呼んだ。）は民族名称を統一しようと活動を行ない，一方政府は民族政策と民族識別工作を開始した。エベンキ人による“エベンキ族”という民族名称に統一する提案は1957年に政府によって公式に認められた（満都呼　1995年　P.97）。

1994年の中国のセンサスによると，中国のエベンキ族の総人口は26,315人であり，中国の55の少数民族の中で人口が最も少ない民族の一つである（呼倫貝爾盟外弁　1995年　P.51）。エベンキ族は主に内モンゴル自治区，黒龍江省，新疆ウイグル自治区などに分布している。内モンゴル自治区にいるエベンキ族はその総人口の大半を占め，その大部分はホロンバイル盟に集中している。この地域にいるエベンキ族の居住の特徴は“大分散”の形をとることであるが，生業から分類すると，ホロンバイル盟莫力達瓦ダフール自治旗や阿栄旗などに住んでいるエベンキ人は南にいる漢民族の影響を受け，農業に従事している。エベンキ自治旗や陳巴爾虎旗の草原地帯にいるエベンキ人はモンゴル人の遊牧文化の影響を受け，牧畜業を営んでいる。大興安嶺北西部の山林地帯のトナカイエベンキ人はトナカイ飼養や狩猟に頼って生活している。1965年，政府はホロンバイル盟の根河市のオルグヤにエベンキ民族郷を設けた。現在はこの郷に住む200人余りのエベンキ人（郷総人口の40%位を占める）は漢民族をはじめ，モンゴル，ダフールなどの民族と一緒に生活している。

一、20世紀初頭までのトナカイエベンキ人社会

周知のように17世紀にロシア人は毛皮を求めてシベリアに進出した。一方，中国では，南方ツングース満州人は“入主中原”し，清帝国を形成する道を歩み始めた。それ以来，先住民たちの生活領域であったシベリアを舞台に，さまざまな歴史ドラマが繰り広げられた。19世紀半ばまで，ロシア人と満州人は武力によって，この広大な地域を自分の支配下に治めることに成功した。特にロシア人は200年に満たない内に，ヨーロッパの国から一気にヨーロッパとアジアにまたがる巨大な帝国へと成長した。先住民は軍事や政治ばかりではなく，経済的にも従属的な立場におかれたため，彼らの在来の生活形態は著しく変化させられた。もちろんその変化は時間の上でも，その性質上も一様に行われたわけではなかったし，諸先住民からの対応も決して同質ではなかった。たとえば，ロシア人は西シベリアでは早々と耕地の開墾を広げ，移住を進めたのに対し，東シベリアでは点々と分布する植民地の拠点の町と，毛皮を得るために次から次へ猟場を求めて彷徨う罠猟師以外には，ほとんどロシア人はいなかったと言ってよい位であった。その原因は主に二つあると考えられる。一つは，地理的な条件によるものである。東シベリアのほとんどの地域には永久凍土層が広がっているため，農耕民のロシア人にとっては，そこは不毛の地であった。アムール・ウスリ流域は土地が肥沃で農耕に適しているが，そこは満州人の支配下にあった。それ以外に交通が不便であったこともあった。

17世紀，アムール川流域には，ダフール，エベンキ，ジュチェル，ナナイ，ウルチ，ウデヘ，オロチなどの先住民が住んでいた。1643年から46年にかけて，ヴァシリィ・ポヤルユフが率いた探検隊がロシア人として初めてアムール地域に到達した。1650年に彼の後継者のイエロフェイ・ハバロフはその地域で略奪に満ちた旅を続けた（ジェームス・フォーシス　1998年　P.119）。この後もアムール地方に対するロシア人の略奪を伴った軍事行動はさまざまなルートによって行われていた。これらの行為に対して清朝政府は警告を続けたが，ロシアは無視していたため，1689年に軍事行動をとった。モンゴル人，ダフール人，エベンキ人などたくさんの先住民も清の軍隊に加えられた。中国側の軍事力優勢を前にして「…ロシア人はアムール川北側すべての地域について断念を余儀なくされ，その後，150年にわたって併合の望みを捨てざるをえなかった」（ジェームス・フォーシス　1998年　P.127）。ロシアと清朝の間に結ばれた

《ネルチンスク条約》によってこの地域に初めて国境線が設けられ，それから19世紀の半ばまで，アムール川流域とその周辺地域には清朝とロシアの直接軍事衝突はほとんど起こらなかった。この間この地域はエベンキや他の先住民にとってはあまり外からの軍事的，政治的干渉を受けずに生活できる場所であった。一方，17世紀以降中国の東北地方は満州人の支配下におかれ，モンゴル人，エベンキ人，ダフール人，オロチョン人などの先住民は清朝の八旗制に編入された（仁欽　1982年　P.14)。

19世紀半ばまで，トナカイエベンキ人の生活形態がロシアの植民地化によってどのように変容されていったのか，いろいろ不明な点が残されている。東シベリア先住民全体やトナカイエベンキ人についての部分的な記述を併せて考えると，ロシアのヤサーク（ロシア帝政期において狩猟を営む非ロシア系民族に課せられた毛皮税）制度や軍事支配によって，彼らの伝統社会組織は強く影響されつつあった。例えば，エベンキ族の氏族組織が変化させられた：もともと「助言者」（エベンキ語で首長にあたる言葉はニュンゲーであって，助言者という意味である）にすぎない族長（ロシア人が作った名称）がロシア人の統治によって全く新しいものに変わった。1822年に公布されたM＝U＝スペランスキーの有名な法令「異民族統治について」により，ロシアはエベンキ人の族長を長老（スターロスタ）と改称し，その選任の条件，任期，及び権限を規定した（B. A. トゥゴルコフ　1981年　P.119)。エベンキ人の社会では，戦争や長距離移動など氏族全体にかかわることがある場合，氏族集会を開き，年長者や選出された首長を通じて全体の意志を尊重した決断に至る。しかし，それはロシア人のヤサーク支払いなどのいろいろな行政的な性格をもった集会へと変わり，伝統的な氏族集会とは全く関係のないものとなった。宗教の面では，シャーマンの活動が制限され，ロシアに強制的に[1]キリスト教化されていった。自給自足のシステムが衰退し，エベンキ人の生活や内部の関係も変化しつつあった。また，トナカイエベンキ人とシベリアの他の諸民族の関係もロシアの植民地支配によって，変動，混乱，変化の時代を迎えた。

正確な時期や場所などについては不明な点があるが，少なくとも19世紀に入ってからロシア人（コサック）やヤクート人はアムール川北部地域で狩猟するようになっていた。ロシア人やヤクート人の行動についてフォーシスは以下のように記述している。「中国辺境のこのあいまい模糊とした状態を上手く利用した最初のロシア人は猟師－罠猟師とコサックであった。彼らは獲物を追って，スタノヴィ山脈を越えて，ゼヤ川とブレヤ川流域を下った。まだ，ヤクートもアムール川流域北部で狩猟を開始した」（ジェームス・フォーシス　1998年　P.225)。19世紀までレナ川上流域に生活していたトナカイエベンキ人はロシア人，ヤクート人の圧力を感じ，南へと移動した。トナカイエベンキ人の口承によると，彼らは19世紀の初め，アムール川をわたって大興安嶺北部で新しい生活領域を広げた。彼らは定住しない生活を送っており，場所を特定することは大変難しいが，よく生活していた地域は，激流河（中国側の河の名前は現在の中国の地図上の名前を用いることにする)，阿巴河や額木爾河などの川沿いの山林地帯であり，根河上流を境に現在中国でオロチョンと呼ばれている人々と隣接していた（シロコゴルフ　1941年　P.126)。

中国東北地方における漢人の移住[2]によって，人口構成は大きく変わりつつあったが，小興安嶺から大興安嶺北部，アムール川の上流地域と中流地域では漢人はあまり定住していなかった。トナカイエベンキ人は清朝領域にあったにもかかわらず，満州人や漢人にはほとんど知られず，ロシア人の支配下におかれ，その影響を強く受けていた。清朝側の先住民とは猟場を巡って争いを起こしていた。一部のオロチョンの氏族の人達とは婚姻関係があったと言われている（シロコゴルフ　1941年　P.186）が，いずれにせよ中国側の先住民とはそんなに密接な関係はなかった[3]と言えよう。もともと，中国のトナカイエベンキ人はシベリア

のツングース系先住民の一部分であり，ロシア側のエベンキ人とのつながりは強かった。しかしそのような関係は政治上，軍事上，人口変動などの要素によって大きく変化しつつあった。

中国のトナカイエベンキ人が19世紀初めに大興安嶺北部に移住してから1890年代頃まで，どのくらいの人口があり，どのように組織されていたかについては詳細な資料はない[4]。ただ，ロシア側の資料（日本語，中国語に訳されたものに限る），シロコゴルフの研究や中国側の資料からは彼らの在来の生活形態が大きく変化しつつあったことは推定できる。彼らの名前はロシア化されていたし，ロシア語が話せる人も増えつつあった。彼らはロシア側のアムール川沿いにある町にヤサーク（成人男性だけ一人３ルーブル）を払い，ロシア側の官憲の庇護を求め，教会にはテントを単位として費用を払い，子供の命名式，結婚式や葬式などを教会の司祭にやってもらっていた。名目上は彼らは全部キリスト教徒であった。“風葬”慣習は“土葬”にとってかわっていった。動物の肉（主に大型シカ，アカジカ）は重要な食料であったが，交換によってロシア人から得られた小麦粉なども日常生活に欠かせないものとなっていた。冬は自分が毛皮で作った衣服，手袋や靴などをよく使っていたが，夏の服はロシア人から入手したものが増えつつあった。1880年から1890年の間には鉄砲が導入された。それによってトナカイエベンキ人の伝統的な狩猟方法，組織，少し後になるかもしれないが，獲物の分配方法などが変化した。また，彼らの氏族組織も崩壊の危機に陥った。19世紀末，移住と氏族分裂によって，エベンキ族の氏族の数は著しく増加したが，氏族自体は目立って縮小した。一家族，一人が一つの氏族を構成するということさえあった。例えば，トナカイエベンキ人の八つの氏族の中で，四つが新しい氏族であって，一つはロシア人によって作られた氏族であった（シロコゴルフ　1941年　P.253)。「同族者の範囲の縮小によって集団主義原理の実行は限られてきた。各家族がますます自分たちだけの力を頼りにせざるを得なくなった」（B. A. トゥゴルコフ　1981年　P.125)。

19世紀半ば以降，ロシアのシベリア開発方針も大きく変化した。東シベリアと極東地方では次から次へと地下資源が発見され，ロシア人入植者の農民は先住民や清朝から農耕できる肥沃な土地を手に入れた。海につながっている極東地方の立地条件もロシア人を魅了した。すなわち，戦略的な視点からもこの地域は大変重要な場所であった（デヴィド・ウルフ　1994年　P.21)。しかし，この地域はロシアの中心地域から遠く離れていた。19世紀末からロシアはシベリア鉄道を作り始めた。これらの開発の進展に伴い地域は大きく変化した。人口構成から見ると，19世紀まではアムール川流域やその周辺地域にはツングース系の人々や他の先住民たちがたくさん住んでいたが，軍事上の理由や鉄道建設，鉱山の開発などによって，ロシアからの移民が殺到しただけでなく，たくさんの漢人や朝鮮人もこの地域に入ってきた（呼倫貝爾盟文史資料委員会　1992年　P.18)。アムール川の周辺地域で駐屯地が次から次へと作られたと同時に，ロシア側の行政組織の地方への浸透も促され，先住民の定住化と改業が進められた。周辺地域の住民の周辺に位置付けられたトナカイエベンキ人はロシア人，ロシア化された同族及び他の先住民の人々からも差別されるようになった。また，中国側の先住民や満州人と密接な関係を結んでいないため，彼らはますます孤立状態に陥った。

20世紀初め以降，この地域の社会状態は一層複雑になっていた。1910年に清朝政府に奇乾町の官憲として派遣された趙春芳は，国境地域の治安を治めるため中国側領域に住んでいたトナカイエベンキ人とロシアとの関係を断ち切り，彼らを自分の支配下に収めようとした。彼は二回も森に入り，トナカイエベンキ人と直接交渉し，いままでのロシア人との交易をやめ，中国側の住民と取引するように要求した。しかし，トナカイエベンキ人はロシア側の報復を恐れて，要求に応じなかった。また，趙氏は奇乾町の近くに住んでいたトナカイエベンキ人の人口，生活習慣などを詳しく調べ「彼らは野蛮人であるが，彼らを抑制することが

できれば，経済的価値があり，国境治安整頓にも役に立つ」（趙春芳宣統三年　P.312）と，トナカイエベンキ人を清朝の勢力下に収める必要があると訴えた。1911年清朝の崩壊によって趙氏の計画したトナカイエベンキを直接支配する目標は実現できなかった。

1919年から多くのロシア人が戦争から逃れてアムール川を渡り，中国側の今の額爾古納市地方に移住した。1925年の時点でロシア人はこの地域の総人口の7割を占めていた（額爾古納市史誌弁 1994年　P.143)。この移住者の中には，トナカイエベンキ人と交易関係があったアンダ（後述）も含まれていた。移住してきたロシア人は土地を開墾し，あるいは森を伐採して耕地を広げ，穀物を栽培したり，川沿いの“草地”で家畜を放牧していた。また，森に入り，狩猟する人もいた。1920年代後半から，たくさんのロシア人の村ができ，教会も作られた（郭布庫など　1986年　P.533)。地域人口構成の変化により，トナカイエベンキ人と外との接触は増えつつあった。中国側のロシア人の村では，年に一回トナカイエベンキ人のために洗礼や結婚式などをやっていた。数は少ないが，ロシア人の村でトナカイエベンキ人の子供が教育を受けていた。その頃，ロシア人の狩猟方法もトナカイエベンキ人に伝えていた。例えば，“蹲鹹場”はその一つであった。その狩猟方法とは，森の中の地面に長さが4～5m，幅が2～3m，深さが30cm位の穴を掘り，中に鹹（塩）を入れ，上を土で埋めておく。雨が降ると，鹹が地表に出てくるので，大型ジカ，アカジカはそれを舐めにやってくる。待ち伏せしていた猟師はそのチャンスをつかんで動物を殺す，という狩猟方法である。一方，ロシア人は森の中で狩猟する際，道案内や動物の分布状態を知る上でトナカイエベンキ人に助けを求めていた。

中国とロシアの政治支配下から外されたトナカイエベンキ人の社会は自由になったのかと言うと，そうではなかった。それは彼らの在来の自給自足のシステムが崩壊し，外から来る物資に頼らざるを得ない状態になったからであった。彼らとの交易を牛耳ていたのはロシア側のコサック人[5]や商人であって，後から中国側の商人も加わった。

二、アンダとの交易

シベリアや中国の東北地方の哺乳動物の毛皮は古くから利用されていた。もともと，これは先住民が寒さから身を守るために使用していたが，古代中国の“中原”勢力が周辺地域へと拡大するにつれて，支配と服従の権力関係を示す“朝貢”関係が形成されることによって，毛皮は王朝の中心へと送られ，皇族や貴族たちが“美”と“富”を象徴するものとして愛用した。この地域における“朝貢”関係は満州人が作った清朝で頂点に達した。清朝の支配下におかれた中国東北地方のエベンキ，オロチョン，ダフールなどの先住民は，清王朝に品質の優れたテン，リス，キツネなどの毛皮を提供することを義務づけられた。中国の歴史文献では「黒龍江土貢以貂為重肇自天命天聡之年」と記していた（徐宗亮1998年　P.125)。このような直接に政治権力関係を示していた“朝貢”が特定の場所（明朝の後半から清朝にかけてチチハルは交易が行なわれる中心地であった）で定期的に行なわれたと同時に，民間レベルでの交換も行なわれていた。前者を“貢市”と言い，後者を“互市”と言う。もちろん，“互市”と言っても平等な交易ではなかった（趙復興　1985年　P.11）。一方，17世紀以降，ロシア人がシベリアに進出し，毛皮税を通じて先住民から毛皮を集め，それをヨーロッパの市場や西アジアの国々に輸出した。当時毛皮から得られた収入は帝政ロシアの収入全体の一割にまで達したこともあったと言われるぐらいであった（布和　1982年　P.221)。アンダとトナカイエベンキ人の交易関係はこのような歴史条件下で成立したのであった。

そもそも，アンダとは何であろうか。アンダとはモンゴル語で友達や友人を指す言葉で，中国東北地方における先住民と交換する商人を言う。19世紀の終わり頃から，1930年代後半にかけて，アンダはトナカイエベンキ人が生活していた地域で

よく活動していた。実はトナカイエベンキ人は交換相手を“アンダ”と呼んだことはほとんどなかった。これはあくまでも周りの住民がトナカイエベンキ人との交換を仲介する者を指す呼び方であった。“アンダ”であるためには少なくとも，交易相手と継続的に密接な関係にあること；値段を交渉しない，一種の贈答関係のような関係を交易相手と結んでいることが条件であった。本論文では交易する相手としてのトナカイエベンキ人と密接な関係にあるロシア側の農民と商人，および中国側の商人をまとめて“アンダ”と呼ぶことにする。

トナカイエベンキ人が大興安嶺北部に移住してから1880年代までの，ロシア人との交易についてのデータは少ない。全体の状況から見ると大興安嶺北部でのロシア人の人口もあまり多くない。トナカイエベンキ人はアムール川の左岸のコサック人の村に行って，農民たちと交換していた。トナカイエベンキ人はコサック農民から主に小麦粉，マッチ，塩，タバコ，酒などを入手したのに対して，コサック人はトナカイエベンキ人から毛皮，大型シカの肉，アカジカの肉，白樺の皮で作った箱，エベンキ式のコート，毛皮で作ったズボンなどを交換対象にしていた（満都呼　1959年　P.102)。これらの交換物から分かるように，交換はトナカイエベンキ人にとっては日常生活用品を中心に行なわれた。

19世紀末からこの地域におけるロシアと中国の貿易活動は活発化した[6]。19世紀末から1920年代までの間に，ロシア側のアンダとトナカイエベンキ人の交易は以下のような二つの変化を見せていた。一つは，19世紀末まで，アンダはトナカイエベンキ人の“ウリロン”を単位として独占的な交易関係を結んでいたが，毛皮交易が盛んになるにつれて，トナカイエベンキ人と交換するアンダの数が増えたため，一人のアンダは一つの“ウリロン”を独占することができなくなり，テントまたは個人と交換するようになった。もう一つは，取引の対象物にも変化があった。トナカイエベンキ人側を見ると，鉄砲（鉄砲も交換によって得られたもの）の普及により，従来の日常生活用品に加えて，火薬，弾丸がほぼ毎回の取引の対象物となっていった。アンダ側を見ると，取引の対象物はリス，クロテンの毛皮などの市場で高く売れる商品のみとなった。例えば，奇乾町の対岸にあるロシアの町ウキロフの商人ダマシャスキは八年間トナカイエベンキ人と交易関係を結び，タタール商人やハルピンから来た中国の商人たちにトナカイエベンキ人から安く手に入れた毛皮を高く売り，大儲けをした（郭布庫など　1986年　P.534)。1917年以降，戦争と混乱を恐れて，たくさんのロシア住民は中国側（今の額爾古納市）に移住してきた。その時，ほとんどのアンダも一緒に移ってきた。彼らはトナカイエベンキ人との交易をコントロールしていたが，交換物資の仕入れは中国の市場を頼らざるを得なくなった。市場の変化によって取引の対象物も変わりつつあった。つまり，毛皮以外に漢方薬の材料（例えば，鹿茸，鹿胎，熊胆，麝香など）が取引の交換物となった（郭布庫など　1986年　P.534)。

1920年以降，トナカイエベンキ人と直接取引する中国のアンダも出現した。ここで，1923年から29年までの間，奇乾町の中国側のアンダ徐傳金のトナカイエベンキ人との取引を表にまとめて見ると表１のようになる。

この表では，アンダ側の供給する品物は明確に記録されているが，トナカイエベンキ人側の毛皮の種類，数量は何も記されていない。当時の資料によると，アンダはその季節に捕れた毛皮をすべてトナカイエベンキ人から取得していた。当時の取引は，すべて物々交換で交換のレートは常にアンダ側が一方的に決めていた。これは私の推定にすぎないが，アンダはトナカイエベンキ人から入手した毛皮などを平均して15から20倍の値段で海拉爾などの市場で売っていた。

トナカイエベンキ人は狩猟とトナカイ飼養を生業として生活を立てていたが，外との接触によって彼らの生活構造は徐々に変化させられていた。交易，とりわけ毛皮交易の比重が増えるとともに食は肉類，魚，木の実，植物などの自給的食品から小麦粉，塩，茶，タバコ，砂糖，酒など，交易

表1　徐傳金によるトナカイエベンキ人との取引（1923～1929年）

回数	徐氏の同行者	運搬方法	徐氏側の荷物の種類、数量	エベンキ側の交換物
1	漢人とロシア人の商人9人	馬40頭	品物不明3,250kg	毛皮
2	漢人の商人2人	馬16頭	茶、酒、小麦粉、布1,450kg	毛皮
3	漢人の商人2人	馬　6頭	鉛、火薬、酒、小麦粉、羊の油、菓子　350kg	毛皮
4	ロシア人の商人2人	馬16頭	小麦粉、火薬15kg、酒30本、冷凍餃子700個	毛皮

注：この表は（郭布庫 1986年 P535～536）と（仁欽 1982年 P59）の資料を基に作成した。

によって入手する食品に依存するようになり，道具も弓，槍，刀などから鉄砲に変化してきた。アンダとトナカイエベンキ人の関係は大変密接に結ばれていて，ある意味ではトナカイエベンキ人にとってアンダは不可欠の存在となった。しかし，トナカイエベンキ人とアンダとの交易関係は非常に不平等な関係であった。また，アンダは前貸しや形式上の親子関係を結ぶなどの手段を通じて，一つのウリロン，あるいは一つのテントのトナカイエベンキ人の狩猟の収穫を独占していった。例えば，トナカイエベンキ人のあるウリロンの一つのテントに生活している三人はロシア人のアンダから前貸しを受けたため，3年間自分用の毛皮さえ残らずアンダに取られてしまった（郭布庫など1986年　P.535)。逆にアンダはこのような交易を完全に牛耳ていたため，アンダが負債をかかえることはまずなかった。

三、日本軍の支配下におかれたトナカイエベンキ人

1931年9月18日に「満州事変」が起こり，中国東北地方は日本の独占的植民地に転落し，“満州国”が成立した。1932年6月に，満州国の興安総署（蒙政部）は大興安嶺の北部，西部の地域，すなわち呼倫貝爾地区に興安北分省を設け，公署所在地は海拉爾であった。省公署の下に旗公署を設立し，形式上は省長や旗長の命令に従い，行政事務を管理することになっていた（興安総署調査課1941年　P.9）が，省公署も旗公署も関東軍の支配下におかれていた。興安北分省は満州国の蒙政部の指令に従い，“廃県設旗”(7)を行なった。それによって，奇乾県は額爾古納左翼旗（額左旗と略す）と額爾古納右翼旗（額右旗と略す）の二つに分けられた。当時，半数以上のトナカイエベンキ人は額右旗に住んでいた（他のトナカイエベンキ人は額左旗と黒竜江省漠河県に住んでいた)。1938年の日本軍の調査によると，激流河地域，得爾布爾河地域と額木爾河地域の三つの地域に住んでいたトナカイエベンキ人は併せて50世帯，約250人であった。

1936年額右旗には満州国の「東蒙貿易公司（会社)」が設けられ，この地域の物資集荷と供給を管理するようになった。東蒙貿易公司にとって，トナカイエベンキ人とアンダの交易を完全にコントロールすることが重要な任務であった。それには二つの理由があった。一つは軍事上の理由から，トナカイエベンキ人とロシア側との接触を断ち切る必要があった。第二は，統制経済を進めるためであった。1936年，東蒙貿易公司は治安を整頓するという理由で，アンダの活動を制限する任務に取り掛かった。1937年2月に，東蒙公司は下記のようなトナカイエベンキ人との交易に関する規定を公布した。

- 東蒙公司はトナカイエベンキ人及びロシア商人の毛皮に対して，交換の優先権をもつ

- 交換する時，リスの毛皮は海拉爾市場相場の8割または6割で計算する
- リス以外の値段の変動の大きい毛皮は海拉爾市場相場の約7割で計算する
- 交易する前にジェラムト（交易する場所）の事情を東蒙公司に報告する

このほかに，交易の時期も規定されていた。交易は年に6回行なう。具体的な日時は8月1日，9月25日，12月10日，2月15日，3月15日，6月1日（この月は一年の決算期で，トナカイエベンキ人は全員参加する）であった（永田珍馨　1991年　P.354)。

アンダはトナカイエベンキ人から入手した毛皮，鹿茸，鹿尾，鹿胎などを東蒙公司に売らなければならなかったし，また，交換用の物資も東蒙公司から買わなければならなかった。アンダには1割の利益しかなかったので，ほとんどのアンダが交易を断念せざるを得ない状態となった。

1938年6月には，東蒙公司は表面的にはアンダとトナカイエベンキ人の交易をコントロールすることに成功した。しかし，アンダとトナカイエベンキ人との取引は闇で行なわれていた。日中戦争の進展につれ，統制経済も次第にエスカレートされた。1939年に満州畜産株式会社が設けられた。(永田珍馨　1991年　P.355）トナカイエベンキ人の狩猟品は会社が取り扱い，現金を払わず，代わりに日常生活用品を配るようになった。中国側の資料によると，毎月一人当たり12.5kgの食品，6～8尺の布，適量の砂糖，茶，度数の高い酒などを渡された。この制度に不満を感じアンダと交換するトナカイエベンキ人は罰せられた。満州畜産株式会社はトナカイエベンキ人との交易からアンダを完全に排除した（呂光天　1986年　P.167)。

1938年関東軍の要請で当時少数民族の調査を担当していた永田珍馨らが興安嶺に住むオロチョン族やトナカイエベンキ人を調査した（永田珍馨　1969年　P.1)。関東軍は彼らの調査報告書に基づいて，15歳以上の男性を居住地ごとに部隊を編成し，謀略部隊として猛訓練をさせた。当時訓練を受けたトナカイエベンキ人の話によると，訓練を受けた人の中に14歳の少年や70歳の老人もいた。訓練は1940年7月から始まり，一回は40人，期間は2カ月で，終戦まで続けた。約80人のトナカイエベンキ人が訓練を受けたと言われている。

関東軍の支配下におかれた時期に，トナカイエベンキ人の生活は統制経済に縛られ，政治的に支配され，軍事上にも利用された。また，病気や戦争などの原因で，トナカイエベンキ人の人口は著しく減少した。

注：

(1) ピョートル大帝が1702年にウクライナ人牧師フィロフェイ・レシジツインスキーをトボルスクの主教にしてから，シベリアの正教会は活発な活動を展開し始めた。1927年に，インノケンティ・クルチツキーが東シベリアの主教として任命された。これらの「シベリア使徒」の活躍を通して，東方正教会の制度が新しい教会と修道院の建設によって広がり，全シベリアにおける正教会強化政策の中で，先住民に対して正教会への改宗が強いられた（ナリン　1990年　P.321～323)。

(2) 清朝の支配が確立して社会が安定してくると，中国内地の人口が急激に増加し，それに伴い東北地方の土地を求めて漢人が進出するようになった。18世紀末から，漢人の移住は更に著しくなった。東北地方の土地が漢人によって開墾され，土地の所有権も次々と彼らの手に渡った。先住民は土地を奪われ，あるいは漢人の圧力を感じ，辺境へ移動した。19世紀後半，東北地方は「開放状態」となった（神田信夫　1992年　P.332～340)。

(3) 17世紀以降，ツングース系の人々はロシア人と満州人の支配下にあった。異なる文化の影響を受け，特にロシア人と満州人の対立が先住民の対立を生じさせることもしばしばあった（シロコゴルフ　1941年　P.158)。

(4) 19紀末から20世紀の初めにかけてのトナカイエベンキ人の総人口については二つのデータがある。シロコゴルフの統計では，100世帯430人であった（シロコゴルフ　1941年　P.230)。中国側の資料では，470人であった（額爾古納市史誌弁　1994年　P.15)。

(5) 南ロシア，ウクライナ，シベリアなどで活躍した騎馬に巧みな戦士集団。カザーク人が中心になっているが，役人や地主の圧制を逃れて国境を越えた逃亡農民も含んでいた。17世紀，コサック人は帝政ロシアにシベリア征服の先頭部隊として利用された。彼らは西シベリアから東シベリアまで略奪の遠征をし，帝政ロシアがシベリアを支配することに大きく貢献した（若松寛　1991年　P.205)。

(6) シベリア鉄道の建設と同時に，経済的なブームも始まった。ロシアと中国間の国境交易が1892年から1902年間に

13倍に増加した（デヴィド・ウルフ 1994年 P.24)。

(7) 1932年，内モンゴルの東北地域で“蒙古自治”や“蒙古独立”運動が起こり，満州国はこれを上手に利用し，その勢力を自分の植民地システムに取り入れようとした。形式上は，この地域の県制を全部旗制に替えた（布仁満都など 1995年 P.39)。

引用文献

（和文文献）

B. A. トゥゴルコフ『トナカイに乗った狩人達』斎藤晨二訳 1981年 刀水書房。

デヴィド・ウルフ「シベリア・北満をめぐる中国とロシア」溝口雄三等編『周縁からの歴史』（アジアから考える3）1994年 P.15～46 東京大学出版会。

ジェームス・フォーシス『シベリア先住民の歴史（ロシアの北方アジア植民地 1581～1990年)』 1998年 彩流社。

興安総署調査課『新興の興安省概説』 1941年 新京朝日通。

荻原真子「エベンキ族」川端香男里など監修『ロシア・ソ連を知る事典』 1991年 P.79 平凡社。

神田信夫「清代の満州」護雅夫，神田信夫編『北アジア史』（世界各国史12）1992年 P.325～350 山川出版社。

永田珍馨「使鹿オロチョン」永田珍馨 『北方騎馬民族』1969年 P.135～162 毎日新聞社。

シロコゴルフ『北方ツングースの社会構成』田中克己など訳 1941年 岩波書店刊行。

若松 寛「コサック人」川端香男里など監修『ロシア・ソ連を知る事典』 1991年 P.205 平凡社。

（中国語文献）

趙復興「北方狩猟民族与“安達”交易」内蒙古社会科学雑誌社『内蒙古社会科学』1985年（第三期）P.9～17.

趙春芳『珠爾乾河総站辺務報告書』 宣統3年（1910年).

呂光天「植民地統治下的使鹿部」鄂温克研究会編『鄂温克族歴史資料』（第二，第三輯） 1998年 P.165～177（未公開)。

額爾古納市史誌弁『額爾古納市档案匯編』 1994年（非公開資料)。

鄂温克族簡史編写組『鄂温克族簡史』 1983年 内蒙古人民出版社。

呼倫貝爾盟外弁編『呼倫貝爾盟簡況』 1995年 海拉爾文化出版社。

呼倫貝爾盟文史資料委員会『呼倫貝爾文史資料』（第四輯）1992年（未公開)。

徐宗亮「北方通誌」鄂温克研究会『鄂温克族歴史資料』（第二輯）1998年（未公開）P.122～125.

郭布庫等「額爾古納旗鄂温克族社会歴史補充調査」内蒙古自治区編輯組『鄂温克族社会歴史調査』1986年 内蒙古人民出版社 P.507～558.

Lindgren, J「満州西北部及使鹿部」《地理学雑誌》（第二，第三期）1930年 P.20～31.

満都呼「鄂温克民族有自己的伝統」烏熱爾図編『述説鄂温克』 1995年P.89～104 遠方出版社。

永田珍馨「馴鹿鄂倫春族」鄂温克研究会編『鄂温克族研究文集』（第2輯）1991年 P.345～368（未公開)。

内蒙古自治区編写組《鄂温克自治旗概況》 1981年 内蒙古人民出版社。

（モンゴル語文献，以下のモンゴル語文献のタイトルは筆者の訳によるもの）

布仁満都など「日本植民地支配下の呼倫貝爾地方」阿拉塔編『呼倫貝爾史』 1995年 P.26～43 海拉爾文化出版社。

布和「19世紀末から20世紀初頭までの中国とロシアの交易」教育学院歴史組編 『呼倫貝爾盟簡史』 1982年 P.221～225（未公開)。

満都呼『ホロンバイル盟における少数民族の風貌』 1959年 内モンゴル人民出版社。

ナリン「17～18世紀のシベリアにおける先住民のロシア宗教に改宗された歴史について」ナリン編布仁訳『ロシア宗教史』 1990年 P.320～347 海拉爾文化出版社。

仁欽「アンダと少数民族との交易」教育学院歴史組編『ホロンバイル盟簡史』 1982年P.12～17（未公開)。